

高きゴールを目指す パース・ウィルキャッツ 走り続けるアスリートたち

車椅子バスケットボールをもっと知ろう!

コートやリングの高さなどは一般のバスケットボールと全く同じだが、ルールには車椅子バスケットボール特有のものがいくつかある。ここでは、そのルールと日本の車椅子バスケットボール事情について紹介する。

競技時間

10分間のピリオドを4回繰り返す合計40分。第1ピリオドと第2ピリオド、第3ピリオドと第4ピリオドの間には各2分間のインターバルをおき、ハーフタイムは10分間。

ルール

基本的には一般のバスケットボールと同じだが、以下の3点は車椅子バスケットボール特有のルールとなっている。

3プッシュ・ルール

車輪を2回こいだら(プッシュしたら)、パス・ドリブル・シュートのいずれかを行なわなければならない。3回以上のプッシュでトラヴェリングとなるが、2回のプッシュの後に1度でもドリブルをすればカウントはゼロに戻り、再び2回までプッシュすることができる。

ダブルドリブルがない

一般のバスケットボールでは、ドリブル中に一度ボールを保持し、もう一度ドリブルを再開する(ダブルドリブル)と反則となるが、車椅子バスケットボールではこの反則は適用されない。

持ち点制 (※詳細はP8を参照)

選手は、障害の度合いや車椅子に座った時の上半身のバランスに応じて、1.0ポイントから4.5ポイントまでにクラス分けされる。コート上5人のメンバーの合計が14ポイントを超えてはならない。

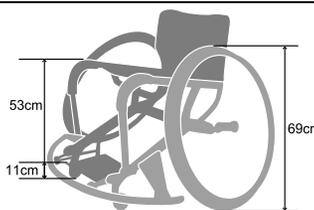
車椅子

「ハの字」型のタイヤが特徴のバスケットボール用車椅子。この傾斜により、回転性を高めて素早いターンが可能になる。選手は、規格の範囲内で個人の身体に合わせてカスタマイズされた車椅子を使用する。また、プレー中に座面から腰を浮かせてはならない。



■車椅子の規格

- 1) 床面からフットレスト前面上部までの高さ 11cm 以下
- 2) 床面からシート・レール上縁部までの高さ 53cm 以下
- 3) 空気を入れた時のタイヤの外測部の直径 69cm 以下



日本の車椅子バスケットボール

車椅子バスケットボールは、1960年にイギリスでスポーツ・リハビリテーションを学んだ中村裕博士によって初めて日本に紹介された。その後1964年の東京パラリンピックを皮切りに全国へとその認知度を高め、1970年には「第1回車椅子バスケットボール競技大会」が東京にて開催。1975年には「日本車椅子バスケットボール連盟(JWBF)」が結成され、現在まで全国的な普及活動と技術の向上が進められている。2007年度の登録チーム数は89チーム(男子82チーム、女子7チーム)、登録人数は816人(男子746人、女子70人)となっている。

情報協力：日本車椅子バスケットボール連盟

コラム その他の車椅子スポーツ

車椅子を使用して行なわれるスポーツはバスケットボールだけではない。ここではパラリンピックで実施されている競技の中から、ラグビー、テニス、ハンドサイクリングを紹介する。

■ ラグビー

タックルなど、車椅子による接触が唯一認められている激しい競技。四肢麻痺者のために考案されたもので、試合はバスケットボールのコートで行なわれる。

■ テニス

コートやネットの高さは一般のテニスと同じだが、2パウンドによる返球が認められている。

■ ハンドサイクリング

車椅子に取り付けるタイプのももあり、ハンドルを回して加速を得る。2004年のアテネ・パラリンピックから同大会の公式種目となった。

Photo Courtesy of The Wheelchair Sports WA Association



情報協力：The Wheelchair Sports WA Association